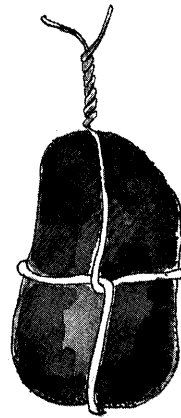


『天皇の逝く国で』

ノーマ・フィールド 著
みすず書房

中村 弓子



本当の批判は本当の愛情があるところにのみ可能であるということを、本書は改めてつくづくと感じさせてくれる。

「私はといえ、二つの世界からおなじように遠いところで宙づりになっている」（本書一頁）と述べられているように、著者は、戦後間もなくアメリカ軍属文官の父と日本女性の間生まれ、

大学以後をアメリカで過ごし、現在アメリカに家庭を持つ日本文学研究者の女性である。

二つの国を愛すことは、それが深い愛情である場合、単なる足し算ではすまされない。著者がいみじくも「宙づり」と表現したように、それは多少なりとも「引き裂かれ」の痛みを伴う。そしてその痛みの中から、やむにやまれぬ批判が生まれ

るのだ。

私自身、フランス文学研究者である日本人として、私なりにこの「宙づり」「引き裂かれ」を味わってきた。そして、昨年、たまたまパリで一年足らずの研究生活を送る機会を得た折にもそれを鋭く味わうことになった。

フランス人が研究に取り組む際の精神の強靱さと徹底性に改めて深い尊敬を感じると共に、その政治生活、日常生活において、あくまで「自分」の権利を主張する姿勢に、さすがフランス革命以来の「人権思想」の伝統だと感じると同時に、現在の極限的な経済危機の中にあつてはもう少し「滅私奉公」的なものがあつても良さそうなものだ、という焦立ちをも正直言つて感じた。

パリ生活のあいだ私は、フランス人エンジニアと結婚してこの地に家庭を築いている教え子の家に折にふれて温かく迎えられる幸運を得たのだ

が、互いに「宙づり」のよしみで、二つの国に対する愛着を表明すると同時に、忌憚のない批判もし合った。

その折に、日本の会社の研究所で二年以上働いたことのある夫たる人が表明した最も鋭い批判は、「日本のサラリーマンは自分というものに対して面することを恐れているし、出来ない」ということであつた。私はそれを、単にサラリーマンのみにとどまらず、日本人全体にとっての重大な問題点として受け止めた。

また、私の教え子が、フランスに長く生活しているといふ日本のことは美化してしまふ傾向が出てくる、と言つたとき、私は、日本の社会では何も深刻な問題がない時は、一致協力してスムーズに事が運ぶ点ではフランスの社会と際立った対照をなしているけれども、ひとたび何か深刻な問題が起こった場合に、集団が進もうとする方向に異

義申し立てをすることは甚だしく困難になり、そのとき起こる「村八分」現象は極めて残酷になりうること、昭和天皇の死の前後に思いもよらぬ速さで社会全体に浸透した「自粛」運動のプレッシャーに、日本の社会の体質が本質的に戦前と変わっていないことを実感してゾッとしたこと、そして日本ではこうした体質は日常生活のすみずみにまで現れていて、この「日常生活のファシズム」が、フランスにおけるのとまさに対極的な日本社会の根本的問題点として存在すると思う、と言った。

そのような次第だったから、日本に帰国してまもなく本書が出版されたとき、私は大いに興味をひかれ、強い共感をもって読むと共に、我が意を得たりという気がした。なぜなら本書はまさに、昭和天皇をめぐる「自粛」騒動のさなかにたまたま日本に滞在していた筆者が、日本の「体制順応

主義」的体質を日々肌で感じつつ、その日本の社会の中で、あくまで「自分」を立脚点として考え行動を決定したがゆえに社会全体の「村八分」と関わねばならなくなった三人の「ふつう」の人々——沖繩国体で日の丸を焼いた知花昌一、殉職自衛隊員の夫の護国神社祭祀に抗した中谷康子、天皇の戦争責任発言で狙撃された本島長崎市長の三人——の事件を考察した本であるからだ。

体制順応主義的ではなく考え行動するということには必然的に二つのこと、「記憶」と「罪」の問題が伴ってくると思われる。自身、アウシュビッツの収容所で終戦を迎えたユダヤ系のノーベル平和賞作家エリ・ヴィーゼルは、広島市へのメッセージの中で、「忘れるのであってはならない。忘れるのは簡単だ。赦すことは難しいが、しかし赦すのではなくてはならない」と言った。加害者と被害者ともに、忘れるのではなく、罪を認識

し、そして赦し合うこと。

昭和天皇の病臥中の「自粛」騒ぎの只中での「戦争責任」発言で撤回要求、脅迫の渦にまきこまれた時に本島長崎市長がした次の補足説明は、本島市長における「記憶」と「罪」の観念の所在を示している。

「私は天皇一人に戦争責任があるとはいっていない。責任ある人はたくさんいるし、私自身にもあると思う。しかし今の政治情勢は異常な感じがする。天皇について発言すると何か感情的になる。

言論の自由というのは、時や所によって制限されるものではない。……私自身の四十二年あまり勉強してきたことの結果がまちがっているとは思わない。『それでも地球は回っている。』天皇を象徴として尊敬もし敬愛もしているが、それでも戦争には責任がある。」(二二二頁)

その「記憶」と「罪」の観念は、他者に向けら

れる前に本島市長自身の中に実存的に根ざしたものであり、そのことは右の文にも窺われるが、後に右翼にピストルで狙撃された時に発表したメッセージの次の文の中にはなおいっそう鮮明に読み取ることができる。

「(前略) ああ、これで私は死ぬんだなあと思いました。そして日ごろ考えていたように、こんな時は小さなことを考えないで、神から与えられた人間の使命、それは困っている人や苦しんでいる人に、どの位のことかできたかなあとという反省でした。また神の教えに背いたことに赦しを求める祈りでありました。(後略)」

これは新聞紙上に発表された時に私が深い感銘とともに切り取って今も手もとに持っているメッセージの一文であるが、この一文は自民党という政治的に保守的な立場にありながらもなぜ本島市長が天皇の戦争責任の問題を「水に流して」しま

えなかつたか、流してしまうべきではないと考えたか、それを他ならぬ「本島等」という一人の人間のうちに説明してくれる。

筆者は「後記」で「私たちにいま必要なのは、国民国家の境界線と経済的利害の閉じた地平を越えたところに立つこと、そしてそこから、二十世紀末の人間にとって、正義にかなう意味ある生活が送れる条件はなにかを問うことだろう。」(三四二頁)と言う。二十一世紀にかけての今後のいわゆる「国際化」の世界は、個人としても国民としても、私たちが「自分」自身をみつめ、真に自身を立脚点として考え行動する時に、そして「他者」をもそのようなものとして尊重する時に初めて開かれるものであること、そのことを本書は改めて教えてくれる。

著者はまた「これまでとはちがう世界を築けるという夢を、大人の現実主義の名のもとに捨てて

しまうわけにはいかない」(三三五頁)と述べており、本書はいわば「記憶」と「罪」を潜在的テーマとするものでありながらも、来たるべき世代への希望と祈願をもって終わっている。それゆえに本書は子どもたちに献げられているのだ。

「まやとマティのために／そしてこの子らといっしょに／一つの世界をつくっていく／子どもたちのために」

(お茶の水女子大学)

